こぶし

第四号

白馬一般募集山行特集号

上越こぶし山の会

こぶし No.4

目次

巻頭

白馬登山特集発行に当って …… 嶋田五郎 3

各班の報告

一班 …… 田中 進 5

二班 …… 小倉泰治 6

三班 …… 小林靖夫 7

四班 …… 大島美昭

五班 …… 清水精一

六班 …… 山崎昭雄

七班 …… 芳沢喜勇

八班 …… 木島忠彦

九班 …… 古木博明 9

十班 …… 嶋田五郎 10

感想文

バス東京駅を出発し
白馬にのぼって
白馬登山
登山
白馬登山におもう
山と私
白馬登山に参加して

1班 大月正行 11
2班 伊佐田早苗 12
3班 池亀朝子 13
5班 飯塚八重子 14
六年 双島信子 15
四年 大島 守 16
6班 木村カズエ 17
7班 原田礼子 17
8班 佐藤モト子 18
10班 南島喜平 19
氏名不詳 20

白馬登山特集発行に当って

上越こぶし山の会会長　嶋田五郎

こぶし山の会が昨年に引きつづいて白馬登山を一般に呼びかけて七月十三日夜行十四日登山という日程で山行を行いました。呼びかけに先立ち会では昨年の白馬山行を検討し、白馬山行の実行委員会を作り、会員の任務分担を決めて取りくみ。

私達のスローガンである「楽しく楽しく安全登山」の立場で、装備等に手落ちのないよう手をつくし、山へ行きたくもなかなか気軽に行けない多くの人達に、美しい自然を通じて体をきたえ、又地域社場の違った人達と交流の場と云うことで白馬山行を呼びかけた。

参加者は当日九十九名で、目標百名に対してほぼ達成でした。当日都合で来れなくなった人が約二十名近くもあったことと、私達の会の力ではバス二台が限度と云うことで、多くの人達の申込みを断わらざるを得なかったという状況でした。今後より多くの人達の要望に答えられるように、会の力をつけることを今後の課題としたいと思う。

今年の山行は昨年のように天候には恵まれず、塚倉を出発してしばらくで雨となり、時たま小休みとなる程度で、終日雨天の中を参加者全員各班のリーダーのもとに協力し合いながら一人の事故もなく、今回の山行を参加者全員の笑顔の中で終ることが出来たことは何よりも嬉しい。

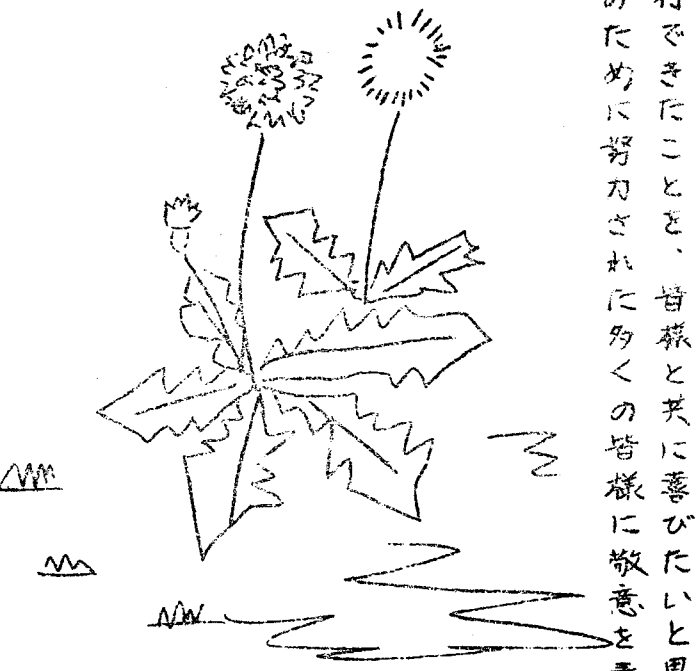
今年の山行をふりかえって見ると、初めての試みでコースを白馬往復と、白馬三山縦走の二

コースを作ったことで、この経験を生かして今後一つの山を多面的な方法で登ることを検討すべきだと思う。

特に今年の山行で良かった点は、小雪渓、大雪渓の要注意箇所の下りに当っては会員以外の人達の協力も得て全員列を乱さず整然と下山したことではないかと思う。しかし、まだ私達の会の力不足で、参加者全員に対する山行前の体調の整え方を徹底することができず、若干の人が山頂を目の前にして下山したことは残念でした。

以上、二、三今回の山行に対しての感想とのべましたが、今後も私達を取りまく多くの人達の要望に答えられる山行の計画をしたいと思っていきますので、より一層の御協力をお願いします。

最後にこの白馬登山の特集号が昨年につづいて発行できたことを、皆様と共に喜びたいと思います。また、編集や、原稿を寄せられ、その成功のために努力された多くの皆様に敬意を表したいと思います。



各班の報告

一班　C.L.　田中進、・・・

（コースタイム）

猿倉（4:20）↓白馬尻（5:10〜5:50）↓大雪渓の頭（7:40〜7:50）↓小雪渓（8:10）↓お花畑（8:35〜8:50）↓村営小屋（9:10〜10:30）↓頂上（11:00〜11:15）↓村営小屋（11:40〜12:30）↓小雪渓（12:55）↓大雪渓（13:25〜13:40）↓白馬尻（14:40〜15:10）↓猿倉（15:55〜17:10）

まずペース配分ですが、大雪渓の地点などは他の班と一諸だったのでおおむね適当であったと思いました。只一班の場合は、筑島さんのバテが以外に早く、大雪渓半ばで早くも最後尾の方にいってしまったのですが、他の人達との脚力が相当違うように見うけられましたので、班としてはこのままのペースを保ってゆくのが適当との判断から、筑島さんはそのままにペースはおとしませんでした。結局は、最後の班の方々に骨を折っていただいたかと思いますが、脱落者の連結の点で不手際があったように思いました。しかし、ペースはそんなに早いとは思われなく、班の人達もあまり疲れた様子もなく、その点一班としてのペースの配分の良否は小生には判断がつきません。

次に村営宿舎ですが、一班が到着したのが9時10分、頂上に向けて出発したのが10時30分で、結局小屋で1時間20分程休んだ訳ですが、昼食とするには時間的にも早すぎましたし、単なる休みにしては時間が勿体無いような気がしました。一班の場合は結局食事をして下さいという事もなく中途半パな休みを取る結果にしてしまいました。

その点機能を発揮できなかったトランシーバーについては責任を感じていますが、今回のような多勢の人が参る場合は、特にトラ

りと各班との連絡が大事な訳で、今後の山行などのことを考え、会としても早急に高性能のトランシーバーを備えるべきではないかと思いました。

下りは、ペース配分、ガイル、その他の面でほぼ満足だったと思います。

二班、　C.L.　小倉泰治、

〈コースタイム〉

猿倉山荘（4.20）→白馬尻（5.10～5.50）→ネブカ平（7.50～8.05）→村営小屋（9.30～10.35）→白馬岳山頂（11.04～11.20）→村営小屋（11.40～12.20）→白馬尻（14.35～15.20）→猿倉山荘（15.50）

※下山のタイムはリーダー個人のもの。

私達2班は、全員参加の12名（女7名男5名）で猿倉山荘を出発したが、白馬尻でひとりの女性が体調がわるいからと言って、ここで止めたのが非常に残念に思った。

白馬大雪渓の登りで私達2班が小隊になってしまい、先組はサブリーダーがいるから大丈夫だと思うが、後組とだいぶはなれているようだ。どうも心配になるので、小生がペースを上げて先組の仲間にやっと追い着いたところがネブカ平である。ちょうど休憩が終えて出発をするところであった。仲間達は調子が良さそうなのでそのまま先に行かせる。そして後から来る仲間をまって、また一緒に行く。

小雪渓のところで雨が強く、かすで前方が良く見えない。小雪渓を渡りお花畑。ここから村子岳が素晴しく見えるのだが、今日はまるでだめ、残念！　お花畑に咲きみだれた花を、あの花は何々だ、この花は私です……やっときれいに咲いたのです、歌の文句まで飛び出して、私達の目を楽しませてくれた。そして村営小屋より少し下のところに、去年も咲いていたミヤマキダマキが、今年も同じところで花を咲かせ、なんともいえない気持だった。

頂上小屋に到着。先組の仲間がお茶を入れてくれるサービスぶりである。
少し早い昼食をすませ全員で白馬岳へ。後線に咲く花をゆっくりと見ながら山荘に着く。
2班全員で記念写真を撮り、下る。
（下山は、小生はかけルを張る仕事があるので仲間達と別になる。）

三班　C.L.　小林清志

（コースタイム）
猿倉（4.20）→白馬尻（5.10～5.40）→
葱平（7.35）→[illegible]小屋（9.20～10.20）
→山荘（11.45～12.00）→村営小屋（12.45
～13.30）→白馬尾（14.50～15.05）→猿倉
（15.45）

四班　C.L.　大島美昭

五班　C.L.　清水靖一

六班　C.L.　山崎昭雄

七班　C.L.　芳沢喜久男

〈コースタイム〉

直江津（21.00）→猿倉（1.50～4.20）→白馬尻（5.10～5.45）→葱平（7.35～7.55）→奥上小屋（9.20～10.20）→山荘（11.45～12.30）→奥上小屋（12.30）→白馬尻（14.47～15.05）→猿倉（15.45～17.00）

私達7班は11名だったですけど、当日参加した人は8名でした。

私達の班は、若い人から中年のいろんな人の集りで、たいへんゆかいな班、又、チームワークは最高の班として、みんなの前で、私はリーダーとして最高だといえます。

登山は技術よりもチームワークが一番だいじだと、つくづく感じました。

私は、この白馬の想い出は、私の青春時代の想い出として一生のこるでしょう。

八班　C.L.　木島忠彦

九班　C.L.　吉木博明

〈コースタイム〉
猿倉（4.10）→白馬尻（5.10～5.50）→
頂上小屋（9.00～9.05）→白馬頂上（9.30～9.50）→頂上小屋（10.00～10.20）→
白馬やり（12.00）→やり温泉（13.35～14.20）→猿倉（16.45）

大型のバスを入れたので、猿倉の手前のカーブは何回か切り返して走る。先発車は全員バスより降りて、少し歩いては乗るというふうにやっていた。後ろのバスに乗っている人達は何んにも知らずに眠っている。先発車には重量オーバーの人達が集まったと思われる。先発車は、2～3回乗り降りして、ようやく朝の猿倉についた。

後より鐘を叩かれて目がさめる。時計を見る。アッ！大変だ。15分余計眠ってしまった。いそいで皆んなにおきてもらい先発車へ行く。先発車も起きはじめた。

注意、出発は4時30分……体操もせずに歩きはじめた。眠い目をこすりながら歩くが、天気が気になる。白馬尻について朝食。おにぎりを食べ終ると同時に、雨が強くなってきた。出発時間まで小屋の中に入って小降りになるのを待つ。バス2台分の人が小屋の中に入ってしまったから、小屋の中はギューギューである。

小雨の中を大雪渓へと歩きはじめる。雪は昨年よりやや多い様である。Bコースは他の班より早く行かねばならないのに、大雪渓をすぎても他の班の人達が後ろにピタリとついてくる。天気も悪いことだし、いよいよとなれば頂上まで行って、やり温泉の方はやめにしようなんて事を考えながら歩く。

頂上小屋には9時に着く。いいタイムだ。頂上小屋にザックを置き、頂上へ行ってくる。頂上はガスの中、そして我々の他にはだれもいなかった。頂上小屋にもどると、みんなが小屋に来ていた。

「9班出発します。」と言ったけれど、6名しかこない。4名は中止。20名がとうとう6

名となってしまった。

周りの良く見えない中を9班はみんなに見送られて出発。

ネズカ平のお花畑にはあまり花はなかったが、白馬からの尾根道は花がいっぱい咲き誇っている。ウルップ草、チングルマ、クロユリ等々……。ライチョウもガスのためか、それとも我々の顔を見てか、安心して子供を引きつれて出てきた。

白馬村子は横を通り、白馬鑓温泉を過してすぐおりる。鑓温泉にはノ所が分れ。入村さんは風呂銭を得した得したと言っていたが、小屋の人に怒ることと風呂に入りたいことをつげると「風呂賃100円ですョー」といわれてガックリ。約1時間、鑓温泉にいて小谷の平を出発。鑓温泉から猿倉まで2時間15分かかってしまった。

猿倉につくと、みんなの元気な顔が見えたので、ひと安心。ビショビショの靴を犬の中に入れて、そっと終った感じがした。

十班、C.L、嶋田五郎

〈コースタイム〉

猿倉（4.20）→白馬尻（5.00～6.00）→遊園小屋（8.00～8.20）→小雪渓取付（9.00）→村営小屋（10.30～10.50）→白馬山頂（11.30～11.50）→村営小屋（12.45～13.30）→白馬尻（15.50～16.30）→猿倉（17.00～17.20）

ミヤマエンレイソウ Aspidistra flavellata Sieb. et Zucc. var. pumila Koidz.

感想文

こまくさ
Dicentra peregrina
(Rudolf.) Makino.

バス乗車時～猿倉

一班　大月正行

七月十三日の、知人三人と途中で同乗させ貰った場所である鼠ヶ関温泉会館前の広場へと車を走らせた。着いた時は大分夕方の暗くなりすでに遅時を過ぎ終っていたところであった。初めて登る山、そして初めて顔を合せた人たちと行動を共にする二日間に期待と胸かな不安とを胸抱させ、少々緊張気味であったのは私ばかりではなかったであろう。

集合の時間がかかってすぐ出発したのであったがバスが走り出してしばらくすると雨が降りだした。五十余名の談笑と人声でバスの中は賑やかしく、眠れない人達も随分居たようではあるが、翌日の事を考えると私には、途中睡眠で二度程下車させられた以外には睡眠を防げるものは無かった。気が付いたら四時頃で、皆

バスから降りる所であった。点呼、注意、体操の後、班は後から二番目に一路白馬岳山頂を目指しにのであった。……

白馬にのぼって

2班　伊佐田早苗

私は、ハイキングには行った経験があるのですが、雪渓のある三千メートルに近い山に登るのは、生れて始めての経験でした。「こんなに高い山に私も登ったのよ」と、皆に言いたくて、こぶし山の会のメンバーの方に励しの言葉をいただいて、白馬に挑戦してみました。体力的には自信があったのですが、皆様のペースについていけるかどうか不安でした。でも、どうにかこうにか「ファイト」の掛声に励まされて、後を振返っては、「ああ、こんなにも登ってきたのか」と一人優越感に浸りながら、上へ上へと、一歩一歩踏みしめながら登りました。

話に聞いていた大雪渓。岩のかけらが、カラカラと音をたてて、崩れる岩肌。とても可憐な野の花。高山植物のあざやかな色。自然には、どうしてこんなにきれいな色があるのだろう！　紫色のウルップ草、白い花をつけたキヌガサ草。大雪渓に入ったすぐ左手の山肌には二ッコウキスゲ。名前の解らないとても小さな花々。etc、etc……雨の中を苦労して登った甲斐がありました。

霧のあい間に、ふと振りかえると、妙高、ひうち岳が、山の頂を見せていました。とても素晴しいながめ。都会の雑踏の中で生活している者にとって、本当に心のなごむ一日でした。

（註）伊佐田さんは、遠く埼玉県新座市から参加された方です。御苦労様でした。

3班　池亀朝子

白馬岳へは、高校生の頃学校登山で一度登ったことがありました。それが、私にとって初めての登山でしたが、その時山頂で見た、全てのものをまっかに染めたタやけの美しさと、はるかに広がる雲海のすばらしさが、とても強烈な印象となって私の中に残り、それ以来、山がとても好きになりました。

そして、ずっと、あの時の感動が忘れられないままに、今回の登山に参加しました。

今回は、あいにくの小雨もようで、その上リーダーをはじめ、多くの方に迷惑をかけながら、やっと山頂に立つことのできた私ですが、とても良い登山をした……と思っています。楽しみにしていた雲海も見えず、目のさめる様な青空もなかったけれど、強い風の中で咲く高山植物の小さな花々や、山頂のそこここに、いろいろな想いをたくさんして積まれている大小のケルンは、私が思っていた通りの姿で有りました。また、一歩一歩登っていく苦しさの中で知った、周りの方々のあたたかい思いやりに、何かとても大切なものを教えられたようで、何よりもうれしく感じました。

登っても、登っても、なお、はてしなく続く雪けいを、うらめしく思いながら登ったことも……疲れたのどに、氷砂糖のひとつぶがすばらしくおいしかったことも……山頂に、とても小さなケルンを積んだことも……ひとつ、ひとつが、私の中でみんな、何にも代えがたいとても大切な思い出になりました。

そして、こういう思い出を、いつまでも大事にしながら、いつかまた、あの山頂に立ってみたい……と、今、思っています。

白馬登山

五班　飯塚八重子

私は、標高二九三三メートルの白馬岳に登った。今思うと、不思議な気持ちになる。会社に勤めて一年と少しになり、スポーツもあまりやらない私が、班の皆についていけるかどうか不安だった。行くまえに、図書館で、百科事典を見たりして知識を得ようと試みた。

さあ、出発です。順備体操は、特に足をよく動かす。猿倉から登りはじめるが、いやにリュックの重みが気になり、白馬尻の山小屋で荷物を少し置き、帰りに持ちかえる。

上越こぶし山の会主催の白馬登山に、私一人で参加したので、話し相手もいなくただもくもくと歩くだけだ。なんにも考えず機械的に足がでるといった感じだ。

雨が降り展望はよくきかなかったが、あたりを眺めるたびに、山の雄大さが私を押し倒すような感じを受けた。

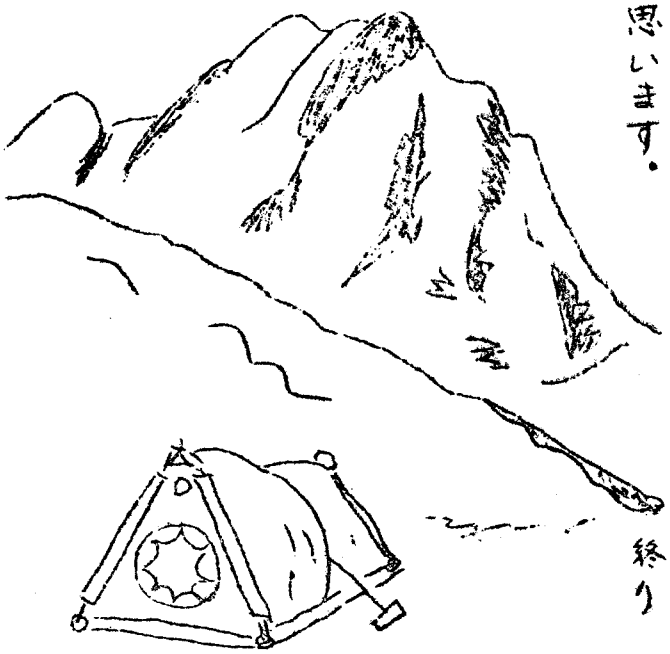
大雪渓を登る時とくだる時、一歩一歩踏み締め緊張して、一番苦労したと思う。

山頂の山小屋に着いて、腰をおろしたとき、言いようもない気分になる。これが満足感というのだろうか。

頂上まで登った私たち、参加してよかったと思う。

私の青春の思い出の一ページに、記録したいと思います。

終り



登山

六年　大島信子

生まれて始めての登山。
山の高さは、どれぐらいかな、雪はあるかなど朝からそんなことばかり考えた。
きょうは土曜日なので学校へ行かなければならない。授業が終るとすっとんで家に帰ってきた。
遠江津の厚生会館のところでみんながバスにのってしゅ発。
いよいよと思うとなんだかおちつかない。弟を見るとぐっすりねこんでいた。
朝、みんな、はんごとにならんでいく。わたしと父と弟は同じ五はんだ。
始めはきちんとならんでいたが、さきにいけばいくほどあいだがあいていった。
だいぶ登ったので下を見ると、目のまえがふらっとするかんじがした。
「どうしよう、落ちたらしんでしまう。家にいた方がよかったな、いまおかあさんは、何をしているかな。」など思った。でも「よわねをはいたらだめだ」と自分の心にいいきかせた。
お花畑についた。高原植物がさきみだれ、とてもきれいだった。そっととって家の庭に植えたいなと思った。
もうすこし、もうすこしとがんばった。山頂の山小屋についた。さっそく父はおにぎりなどをだしたが、わたしは、たべたくなかった。
すこしやすんで、頂上へむかった。すこし登ったところで父と弟は、ひっかえした。わたし一人で登った。といってもまわりにたくさんの人がいるが、心配になってきた。と中までいったがまたひきかえした。
リーダーの水島さんからつれていってもらった。そしていろいろ説明をきいたり写真を

写してもらった。とてもよかった。
帰りは行きとちがってらくだ。でも雪のあるところはすべった。二かいころんでおしりをついてしまった。
バスに乗りいよいよ家に帰る。と思うとほっとした。けがもなくぶじに山をおりられた。
ほんとうに楽しい一日だった。
きたらい年も登山をしたい。こんどはちがうルートを登りたい。

四年　大西　寿

ぼくは、この夏に、ふへ、いきました。ふへへいくと、どちらが北なのか、わかりませんでした。
ぼくは、一ぱんびっくりしたのは、ぶたゆきがあったことです。

山の高さは、二千九百五十二メートルです。はじめ見たとき、このふにのぼれるかしんぱいでした。
ぼくは、やっとこさっとこのぼってみると、ゆきが海に、見え、名がりくに見えて、目をまわしました。
かえりは、おとうさんが、ころんだりがやくち・6回で、ぼくは、やくる・4回です。かえりは、くつの中がもうびちょびちょでした。
もうくたくたでしたが、なんかいも、なんかいも、ふへ、いきたいです。

あわり、

白馬登山に

6年　本村ヨシエ

友達のアルバムの中に、山の写真が何枚かあった。頂上から見る山々のすばらしいこと。それは、写真を見るだけでは満足できない気持ちを起すほど、また、白馬登山の様子を撮ったスライド、私は是非頂上からの写真を見たいと思った。

何がなんでも頂上まで行こうという気持ちで登り始めたので、大雪けいを無用に帯びを持とうと思った。一歩一歩慎重に足を運ぶ。息が苦しくなってくると、その足も前にもいなくなる。私の他の人達が平然として登っているようで、自分の体力のなさを思わされた。

挙るときは、お花畑を楽しく想像しながらであったが帰りは一刻も早く大雪けいを抜けたかった。こんなにまで疲れたのかと思う程、重く、足は痛らい様にという注意を守るために動いていた。金沢線を展望した為かえりのバスの中では、眠ってばかりだった。

天候だが、霧雨が見れ学校名ではあったが私はバケルことをかぶしていたので、カンカン照りよりも、よほどよかった。登れてよかった。

最後に、こぶし山の会もの皆様のおかげで安心して行けたことを感謝いたします。

7班　原田礼子

私は、今回初めて登山というものを経験したのですが、まず第一番に思った事は、参加して良かったなという事です。初めは登れるかどうか不安で、もしかしたら途中で落伍し

てしまうんじゃないかと心配だったのですがリーダーさんや7班の方々の励ましによって頂上まで行く事が出来、本当に良かったと思いました。小雪渓から白馬山荘までの間は、一番きつく、もう足が上がらなく、って、一歩一歩ふみしめて歩いたと言っていいくらいで、白馬山荘へ着いた時、7班の人達に、よく頑張ったと言われた時ほどうれしく思えた事はありませんでした。下山の時は、思ったより楽で、調子にのって降りていったら大雪渓のあたりで30回もころぶようなはめになり全身雨と雪でぐっしょり。本当にいい想い出が出来たと思います。ただ残念だったのは、天候が悪かった事です。でもこれにこりずにまた山へ登ろうと思います。そして今度こそ、天候の良い山の景色を目に焼きつけて来ようと思います。

山と私

8班　佐藤モト子

もう山登りする事などないと思って、キャラバンシューズを他人にあげてからもう約十年。思いがけずゝ山へ行くチャンスしを夫が作ってくれました。それがこの「こぶし山の会」の白馬登山でありました。

山は縁がないとあきらめて、子供が大きくなったら、一緒にキャンプにでも行ける位がせいぜいと思っていたので、体力作りなど、普段はもとより全然心がけていなかったのでいざとなると自信がなく、説明会の時から、若い人たちに圧倒され、緊張と不安の連続でした。それでも、これを機会に又山登りが出来るかも知れないという期待も大きかったので、どうしても落ごしたくない思いでした。

残念ながらずっと雨の中での登山。一歩一歩踏みしめる白い雪の山。ただ頂上に向って、

重い足苦しい心臓をおさえて足を運ぶくり返し、けれどそのうちに登りは思ったより、らくに頂上に行くことが出来ました。リーダーの指導が大変よく、気持もらくに体調も整えられたのだと思います。けれども下山になって雪渓を下り終って白馬尻までたどりつきホッとしたとたんに、右のひざがおかしくなって、五、六歩行くともう歩けない、自分のいざを持って歩きたいくらいになってしまい、もうへばりそうになってしまった私。バスの待っている所へ来た時はほんとに、ホッとすると同時にうれしかったしあわせもう山登りはだめだとその時は思って家に帰ってきました。

けれど、今思い出すことはバスの中での一きわ美しい高山植物の数々、ほほえましい雷鳥の親子、など偉大な自然のふところとたくましくてやさしい山の仲間たちなど、又山へ行きたいという気持でいっぱいです。苦しくて退屈の不自由をして得た自由と目的、ほんとに自分の足でやりとげたという実感が又山へと広がる気持になるのだと思います。

白馬登山に参加して

10班　南島喜平

僕は登山というもの、あまりやらないのですが、今回、参加させてもらいまして、登れば登れることが良くわかり、又自分の力が、どれだけかわかり、これかも少しづつ、山へ行きたいと思っています。

僕は今回参加する時に、ネブカ平まで行ければ良いと思っていましたが、十班班長の島田さんに、力をかり、大雪渓を登り、中頃で何回帰えりたくなったかわかりませんが、始めの目てき地までは行こうと思い、やっとの思いで、ネブカ平まで行きました。すると島田さんはここまで来て、お花畑を見ないのでは、白馬に来たとはいえないといわれ、それではと思い、お花畑まで行きまして、やはり来て良かったと思い花を見ていましたら、又もや島田さんに、ここまで来て山頂まで行かなくてはと……

とう〳〵山頂小屋まで行ってしまい、時計を見れば十一時三〇分、うしろを見ればうしろにはだれもいず　それでもとう〳〵来たのだと思い、その時はもう喜びで一ぱいでした。僕はこれがあるから山へ皆行きたくなるのだと思い、帰ったら、会社の人にも話して、多くの人に山へ行く事を話したいと思います。

それから二週間後妙高へ会社の人達と行きましたが、やはり山は良いものだと思いました。いくらおそくても良いからマイペースでこれからも多くの山へ登ろうと考えています。今回はどうもありがとうございました。

又行く時がありましたら、話してもらいたいと思います。

二度目の白馬登山、今度こそは快晴であろうことを期待して参加させていただきました。残念なことにあいにくの天候でおわってしまいましたが、前回に比して得ることは多かったと思っています。

猿倉からお花畑までの間、遅れ気味で登っていましたがお花畑に入って、会員のかたにこれはウルップソウ、あの白いのがシロウマレンゲ、ちいさいピンクのこれがコイワカガミ……と教えていただき疲れなどはどこへやら、花の姿形と名前を一致させようと懸命でした。中でも愛くるしいチングルマの小さな一群　あやしげな記憶ですがエーデルワイスの一種であるウスユキソウの消え入りそうな姿が忘れられません。そして落石によるカランカランというにとえようのない響き……山好きの皆さんが、つらくても苦しくても山にひかれるその心持ちがすこし理解できたよう

な気がします。

とにかく、無事山頂に立てるだろうかと心配しながら白馬にのぞんだ私が小屋の小石を拾い、いくつかの花のあとを見て、また機会があったら登ってみたいと思いながら帰路につくことができたことを感謝するとともに、山の会の皆さん、山好きの皆さんの今後のご健康とご活躍をお祈りいたします。

(註) せっかく寄稿していただいたのですが、氏名が記載されておりませんでした。ご存知の方はお知らせ下さい。

(編集部)

"うつし世の煩悩かなし
何ごとも　忘れはてむと
われ　山に来ぬ"

山は何も答えない。
しかし、人間は必死になって山に問い続ける。
何を？
愛するこの美しさを、
旅行くことの楽しさを、
迷う心の行く末を、
傷つきながらも、生きなければならない
人間、だから、
山に来て、そのふところの中で、時にしみじみと自分を省いて見たいとさえ思う。
山ゆけばほのかに涙さしぐまる
山が、をしへし山のかなしみ

山と詩人／吉井勇

へんしゅうこうき

白馬登山、おつかれさまでした。多くの方々が参加され、感想文を書いてくださいましてありがとうございました。

ところが、会員諸氏の原稿がなかなか集まらず（しかも最後まで出さない人がいて）こんなにおそくなってしまいました。参加者への会の最後の責任を果す機会でしたのに。大変残念に思っています。

今後、こういうことのないように、おたがい気をつけましょう。

（S）

こぶし 第4号 白馬一般募集山行特集号

1974年10月15日発行

編集 上越こぶし山の会
編集長 吉木博明

発行所 上越こぶし山の会
942 上越市東雲町2丁目
TEL. 0255(43)8447（鵜田）
943 上越市東本町5丁目1番33号
TEL. 0255(24)3737（彩本）

J. K. A. C.